

## 中学生の運動部活動における主体性

### *Shutaisei* of Junior High School Students in the Athletic Club Activities

大 畑 美喜子\*

山 本 裕 二\*

Mikiko OHATA\*

Yuji YAMAMOTO\*

Participation in club activity presents an opportunity to active with *Shutaisei*, builds good human relationships, and facilitates goal orientation of junior high school students. Advisor teachers influence student' psychological growth greatly; such teachers emphasize that it is important to foster *Shutaisei*. Therefore the purpose of our study was to investigate how advisor teachers recognized *Shutaisei*, and what they considered to be appropriate club activities and behaviors. We conducted semi-structured interviews of eight advisor teachers. We asked, "How do you recognize *Shutaisei*", and "What kind of action that your students work on their club activity with *Shutaisei*". As a result of having analyzed a reaction provided in our interview, we showed it as follows. 1) The advisor teacher who participated in this study thought that *Shutaisei* was the attitude and action to face one's goals and problems voluntarily and intentionally without receiving the instructions from others. 2) The action that the students work on the club activities with *Shutaisei* were consisted of four categories; a) to analyze the results of their game or set their goal by themselves, b) to have the interest to the skill acquisition and to make trial and error until to gain the skills, c) to engage in their practice positively, d) and self-assertion and to build a human relationship.

### 序論

アスリートへの心理サポートは様々な立場で実施されており、その目的には競技力向上・実力発揮だけでなく、心理的成熟・成長を目指すことも含まれている（中込、2013）。現在、東京オリンピックに向けて、各競技団体によるトップアスリートへの心理サポートが実施され、それらの多くは、心理スキルトレーニングと称して、いくつかの心理スキルの習熟に焦点づけたサポートが行われている。しかし、競技場面でアスリートが遭遇する状況はそれぞれ異なっているため、個々の心理スキルを競技場面で応用するといった側面には限界がある。つまり、心理スキルの習熟に加えて、それを微妙に異なる状況で適切に応用していくためには、柔軟な対応や判断を迫られる。すなわち、アスリートは自身が置かれた状況の判断やその時々心理状態への深い理解に基づき、自らが対処していかねばならない。そのためにアスリートに求められる一つの心理要因として「主体性の獲得」が重要であると考えられる。モーグル元オリンピッ

ク選手、上村愛子氏のスポーツトレーナーを務めていた鈴木岳氏は、「一流アスリートが試合本番で力を発揮するには、誰かに教わるという意識で日々を過ごすのではなく、自ら考え行動するという主体性を持つことが大切」と、「主体性」の重要性について指摘している（日経ビジネス associe, 2009）。また、岩田（2012）も、日本代表サッカーチームを例に挙げ「監督のイメージするプレーを、選手は主体的に判断し具現化するのが仕事である」と記しているように競技現場においては、アスリートが主体性を獲得することの重要性が示唆されている。

それでは、アスリートがそのような主体性を獲得するためにはどのような方法が考えられるのであろうか。アスリートの心理サポートを通して、彼らの主体性獲得について検討された研究がいくつか実施されている。例えば、村上ら（2014）は、野球に従事する高校生アスリートに対し、メンタルトレーニング及び個人面接による心理サポートを実施した結果、「主体的運動参加」が高まったことを報告している。特に、アスリート自身の考えを聴くことに注目した心理サポートや日誌を記録

\* 名古屋大学総合保健体育科学センター

\* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

することにより、アスリートが自己を客観的に捉え、自己の課題をみつけることに有効であることが示された。また、藤後ら(2015)は、柔道を専門とする高校アスリートに対し、3か月間の目標設定を中心とした心理サポートを実施した結果、彼らは主体的・計画的に柔道に取り組むことが可能となったと述べている。そのようなサポートを経験することで、アスリートは指導者にやらされて練習をするのではなく、自分の意志で目標をもって練習に参加できるようになったと考えられる。和田ら(2017)は、大学生レスリングチーム全体の練習を計画している主体群(5名)と、計画された練習を受容している受容群(29名)において、彼らの練習の質にどのような違いがあるかを比較検討したところ、セルフモニタリングの項目で主体群が有意に高い得点を示したとしている。つまり「練習に対し主体的に関わることにより、自己自身への気づきと目標までの見通しをもつ力に影響を及ぼす」ことが明らかにされた。さらに、秋葉ら(2016)は、「目標を達成するためにやり抜く力、耐える力である Grit (Duckworth et al, 2007)」という力は、「すべてのキャリア(人生)に対して積極的に働き、キャリアを豊かにする能力の一つ」であり、「競技目標を達成するために主体的に競技に取り組むことにより養われる」と述べている。

以上のことから、アスリートに対し、彼ら自身の考えを引き出す面接や、自身のプレイまたは課題を客観的に見つめる日誌や目標設定を中心とした心理サポートを実施することで、彼らの主体性が育ち、また主体的に練習に取り組むことで、質の高い練習につながる予想される。さらに、主体的に競技に取り組むことにより Grit が養われ、アスリートのキャリアを豊かにすることにもつながるといえる。しかし、これらの研究における「主体性」についての定義づけや、「主体性」を構成する要因に関する具体的な言及はみられない。

さて、心理サポートでは、アスリートであると同時にそれぞれの発達年代の者たちが共通して取り組むべき心理社会的課題を視野に入れねばならない。したがって、各年代において「何を今体験しておくべきか」といった生涯発達の視点をサポートする者も把握すべきである(中込, 2013)。ここで、中学生という時期は、心身に子どもから大人へ移行する過程であり、自我に目覚める年齢でもある。村瀬(1996)によれば、「自我に目覚めた中学生は、(中略)自分から進んで状況に対決したり、自分の責任や運命を自覚して極めて主体的に生き抜く力が生まれてくる」年頃である。角谷・無藤(2001)は、主体性や親和性の欲求が高まる中学生には、主体的に活動できる場や仲間との親密な関係を築くことのできる場が必要であり、部活動がそのような場

を提供する役割を果たしていると指摘している。すなわち、中学生という時期を生きる彼らは、部活動という場でさまざまに起こる困難な状況に向き合い、またそこで与えられた役割への責任をどのように果たすかといったことを自覚する経験を通して、彼らの「主体的に生き抜く力」を育むことができると考えられる。

そのような心身の成長過程にある中学生に対する教育活動の一環として、実施される運動部活動の意義は、「体力を向上させるとともに、他者を尊重し他者と協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育むなど、人格の形成に大きな影響を及ぼすものであり、生涯にわたり健全な心と身体を培い、豊かな人間性を育む基礎となるもの」と、文部科学省がまとめた「運動部活動での指導のガイドライン」に明記されている(文部科学省, 2013)。さらに、この中で、「運動部活動の顧問の教員は、運営・指導者としての一方的な方針により活動するのではなく、生徒との意見交換等を通じて生徒の多様な運動部活動へのニーズや意見を把握し、生徒の主体性を尊重しつつ、各活動の目標、指導の方針を検討、設定することが必要である」と提唱している。さらに、スポーツ庁が平成30年に示した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」の前文で、運動部活動の在り方に対し抜本的な改革に取り組む必要性について言及され、「生徒の主体性を尊重」することを強調している。

運動部活動が中学生の心理的側面に与える影響を調べた研究が様々な角度からなされている(今宿ら 2019、角谷 2001、2005、角谷・無藤 2001、渡辺 2016、深見・岡澤 2018、岡田 2009.)。その中で、角谷・無藤(2001)は、部活動場面において「中学生の発達課題にかかわる欲求(所属欲求と自律欲求)が満たされていることが、中学生の充実感や学校生活への満足度に対して重要」であり、生徒が主体的に活動したり、仲間との良好な関係や、目標志向性を築くことのできる場として、部活動が役割を果たす可能性を示している。また、岡田(2009)の研究において、部活動に積極的に参加している生徒は学校生活の様々な領域で良好な状態にあるだけでなく、心理的適応も高いことが報告されている。

そのような部活動において生徒の心理的成長に影響を与えるキーパーソンは、顧問教員であるといえる。彼らがどのような指導方針で生徒に関わるかが、生徒の様々な心理面に影響を与え、中学生の主体性の育みに重要な鍵となると考えられる。もし、顧問教員が主体性について誤った理解をし、誤った関わりをしていれば、生徒の主体性を育むどころか阻んでしまう危険性がある。しかしながら、実際に顧問教員が主体性についてど

のように理解しているのかに関する研究はみられない。

以上のことをふまえ本研究では、実際に中学校で運動部活動で指導している顧問教員を対象にインタビューを行い、彼らが運動部活動における生徒の主体性に関し、どのように理解して関わっているのかについて明らかにすることを目的とした。また、運動部活動は、生徒の人間性の育成はもとより、アスリートとしての育成においても重要な役割を担っていると考え、本研究での知見がトップアスリートの主体性育成につながることを狙いとしている。

## 方法

### 1. 調査対象と調査時期

東海地方の公立 A 中学にて運動部活動の指導をしている顧問教員のうち、面接調査を希望した 8 名（男性）を対象とした。平均年齢は 32.3 (±3.24) 歳で、運動部活動指導歴は平均 8.9 (±3.68) 年であった。

調査期間は、平成 31 年 2 月～3 月であった。

### 2. 調査方法

1 対 1 形式の半構造化面接を実施した。面接に要した時間は一人当たり約 1 時間であった。面接は調査中に侵入者がなく周辺が静かな環境を保つことのできる、A 中学校の相談室にて実施した。調査開始前には、本研究の趣旨を説明し、参加協力の同意を得た後に、会話を IC レコーダーに録音する承諾を得た。

### 3. 調査内容

まず、フェイスシートに、氏名、年齢、教員歴、部活動指導歴、顧問教員自身の競技歴を記入した。次に、半構造化面接では、1) 「あなたの考える主体性とはどのようなことであるか」、2) 「生徒が部活動に主体的に取り組むとは具体的にはどのようなことか」の 2 つの質問を実施した。

### 4. 分析方法

まず、IC レコーダーに録音された会話をすべて逐語に起こし、それらを分析対象とした。次に、1) の質問に関しては、得られた各反応から、指導者の考える主体性についてまとめ、2) の質問については、大谷 (2019) が考案した SCAT (Steps for Coding and Theorization : 以下 SCAT) を用いて分析した。これは、逐語記録をセグメント化し、それぞれに (1) データの中の注目すべき語句、(2) それを言い換えるためのテキスト外の語句、(3) それらを説明するようなテキスト外の概念、(4) そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順に 4 段階の

コーディングを行い、それらをつないで「ストーリー・ライン」を記述し、最終的に理論記述につなげるという手法である。この手法は「明示的で段階的な分析手続きを有する (大谷, 2019)」。また、「1 つだけのケースのデータなどの比較的小さな質的データの分析にも有効である (大谷, 2019)」という理由のため本研究で採用した。本研究における質問項目 2) に対する分析の手順は、全調査対象者の質問項目に関連する逐語を質問項目ごとに抽出し、対象者毎にストーリーラインから理論記述を作成した (表 1)。そして全対象者から得られた理論記述を、共通した内容や重複する表現などを整理し、カテゴリーごとにまとめ、それぞれの構成されたカテゴリーについて検討した。

### 5. 倫理的配慮

本研究は、名古屋大学総合保健体育科学センターにおける研究倫理審査委員会の承認を受け実施した。

## 結果と考察

### 1. 顧問教員の考える主体性について

この質問に対しインタビュー調査で得られた顧問教員の考える主体性は、「他者からの指示を受けることなく、自分の考えを持って意図的に行動ができること」、「自分で考えて、したいこうなりたいたいという思いを持ってなにかを取り組んだりする」、「自分たちで気付いて、考えて自ら進んで行動ができる」、そして「課題を持ってそれを克服しようと動ける、動こうとする」であった。これらの反応から顧問教員の考える「主体性」は、「自分で」や「自ら進んで」といった「自発性」が求められ、「自分の考えをもって」、「自分で考えて」や、「意図的に行動できる」、「課題をもってそれを克服するために行動する」からは「意図的に目標・課題に向き合う」といえる。したがって、本研究での顧問教員の考える「主体性」とは、「他者からの指示を受けることなく、生徒が自発性をもって、意図的に目標や課題に向き合う態度や行動」であると考えられた。

「主体性」について広辞苑 (第七版) では、「主体」について「主観と同じ意味で、認識し、行為し、評価する我をさすが、主観を主として認識主観の意味に用いる傾向があるので、個人的・実践的・身体性を強調するためにこの語を用いる」とあり、「主体的」については「ある活動や思考などをなすとき、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま」とし、さらに「主体性」は「主体的であること。また、そういう態度や性格であること」と説明している。以上のことから、「主体性」と

表1 SCATによる分析ワークシートの例

発話者	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言い換え	<3>左を説明するようなテキスト外概念	<4>テーマ・構成概念(前後や全体の文脈を考慮して)
研究者	今度は運動部活動に限定するんですけども、生徒が主体的に運動部活動に取り組むということは具体的にはどのようなことですか	生徒が主体的に運動部活動に取り組む	主体的にとりくむとは		
A	試合の反省に基づいて、自分たちのストロングポイントと、ウィークポイントを、自分たちで分析して、共有して、それを元にトレーニングの目標を立てて、日頃のトレーニングに臨むことができるですね。	試合の反省に基づいて、自分たちのストロングポイントと、ウィークポイントを、自分たちで分析して、共有して、それを元にトレーニングの目標を立てて、日頃のトレーニングに臨むことができる	試合の分析と反省/長所と短所の分析/分析結果の共有/分析結果を基にトレーニング目標設定と実際のトレーニングにつなげる	試合の良い点と悪い点の客観的評価/戦術的/	試合での良い点と悪い点を客観的に分析/分析結果を共有しその後のトレーニングの目標設定時に、有効に活用/
A	部活動という側面で行くと、あとはやっぱり人として、どういふふるまいをするべきなのかっていうところが、自分たちで、完璧な人間はいないし、完璧な手段はありえないので、誰かひとりふたり遅れてくるから。例えば、遅刻してきた子がいました。で、その子をどう集団が受け入れるのかっていうところで、ただなあなあに、あ〜お前遅いよ〜って入れちゃうのか、お前なんで遅れてくるんだ、みんなちゃんと時間守っているのにな、それはお前ないぞって、いうふうに厳しいことも自分たちで言えるし、注意し合えるとか、そういうところまでできる子たちは、やっぱり人間性の部分でも、主体的に他者と関わられるのかなというふうに思います。	人として、どういふふるまいをするべきなのか/厳しいことも自分たちで言える。注意し合える/そういうところまでできる子たちは、やっぱり人間性の部分でも、主体的に他者と関わられる	人間性・人格の成長/厳しいことをお互い言える/注意し合える/主体的な他者との関わり	心理的安全な関係の構築/良好な関係性/人間関係形成の練習	人間性・人格の成長/厳しいことを言い合える・注意し合える関係性の構築/主体的な他者との関わり
ストーリーライン	部活動に主体的に関わるとは、試合での長所と短所の分析を生徒間で行い、その分析結果の共有をすること。さらにその分析結果をその後のトレーニングの目標設定時に、有効に活用する。また、生徒同士で厳しいことを言い合えたり、注意し合えたりする関係性の構築が、主体的な他者との関わりにつながると考え、人間性や人格の成長も指導の視野にいれる。				
理論記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>部活動に主体的に関わるとは、試合の分析を生徒自身で行い、その分析結果を全体で共有する場を設けること。</li> <li>その分析結果をその後のトレーニングで目標設定で有効に活用することを目指す。</li> <li>生徒同士で厳しいことを言い合うといった関係の構築は、主体的に他人と関わるることにつながる。</li> <li>部活動を通し人間性や人格の成長を目指す指導。</li> </ul>				



は「認識し、行為し、評価する我」である「主体」が、活動や思考の際には他から導かれることなく「自己の純粋な立場」で行動することといえよう。また、主観的と主体的との違いについて、木村(1994)は、「主観的」は「判断の対象から距離をとり、対象に巻き込まれない冷静な態度で判断する立場」であり、「主体的」は「状況に密着して状況と一緒に動き、状況の変化に参加する立場」であるとし、それらは、判断するという事態をどの角度から見るかにより区別すると述べている。

中学生を対象に子どもの「主体性尺度」を開発した浅海(2001)は、主体性を「他のもの(周囲の人の言動、自分の中の義務感(こうしなければいけないといった考え))にとらわれず、行為の主体である我として、自己の純粋な自由な立場において、自分で選択した方向へ動き、自己の立場において選択し、考え、感じ、経験すること。またそういった、心の構えがある状態」と定義づけた。

次に、主体性と類似した言葉に「自主性」があるが、主体性を自主性の下位構成概念として取り扱う立場の小宮山(1956)は、主体性について「他の意見に左右されることなく、自己の主義に従って、対象に積極的に働きかけ、自発的活動を行うこと」とし、同じ立場をとる藤原(1968)は、主体性について「他者から影響されないというだけでなく、自らの問題を自分自身の問題としてとらえようとする、積極的な構え」としている。

以上の先行研究の定義は、本研究での顧問教員の考える主体性、すなわち「他者からの指示を受けることなく、生徒が自発性をもって、意図的に目標や課題に向き合う態度や行動」と類似しており、顧問教員はそれらの定義と共通した認識を持っていたと考えられる。

さらに本研究では、以上のことをふまえて、「主体性」とは「認識し、行為し、評価する我である行為の主体が、活動や思考の際には、他(者)から左右されることなく、自己の純粋な価値観や意図、意志や判断に基づいて、対象に積極的に関わり、自ら考え、選択し、行動すること。またそのような心構えがある状態のこと」とし、「部活動に主体的に取り組む行動」とは、「部活動に対し、上記のような主体性を持って実践すること」と定義した。

## 2. 生徒が部活動に主体的に取り組むことについて

この質問では、生徒が部活動に主体的に取り組むとは具体的にどのようなことがあげられるのかについて、顧問教員の反応を得た。このインタビューの内容に対しSCATを用いて分析を行った結果、次の4つのカテゴリーに分類された。

### 1) 試合の分析や目標設定を自身で行う

このカテゴリーでは、「試合の分析を生徒自身で行い、その分析結果を全体で共有する場を設ける」や「分析結果をその後のトレーニングの目標設定に活用する」など試合の分析を生徒自身で行うことやその結果を目標設定につなげることが述べられた。先行研究においても、アスリート自身で自己の目標設定をすることと、主体的にトレーニングに取り組むこととの間で影響し合っていることが認められており(藤後ら、2015)、本研究においても目標設定の重要性が認められ、さらにそのために必要となると思われる試合などの自己分析についても言及された。

### 2) プレイの課題及び技能習得への関心を持ち、試行錯誤しながら取り組む

このカテゴリーでは、「自分のプレイに関する課題を持ち、それを克服するために行動する」や「自分の課題について試行錯誤する」といった課題への取り組みについての言及がみられ、さらに、「技能を試行錯誤しながら習得すること」や「他の選手との対戦で、動作や技能に関心を持ち観察する」などの技能への関心を持つことや習得するための取り組みについて述べられた。森岡(2005)によると、「主体に課題として与えられる自己の姿」を「内的人間」と言い、この「内的人間」は「人から強制されて成長するものではなく、悩みという主体的な体験を通じて成長する」としている。つまり、自己の課題とどのように取り組み、向き合い、悩むことができるかが、主体性の育みに影響していると考えられる。

### 3) 練習への専心的取り組み

このカテゴリーでは、生徒の練習への取り組み方に関する反応が得られた。その中には、「練習に必死に取り組むこと自体が主体的な関わりである」という考え方や「生徒自身が練習メニューの意図を意識し考えながら練習すること」が主体的な取り組みであると述べられた。このカテゴリーは、1)及び2)のカテゴリーで言及された、目標を設定することや競技に関する課題への取り組みが可能となるために必要な要因として考えることができるだろう。本研究での主体性の定義でもある「活動や思考の際には、他(者)から左右されることなく、自己の純粋な価値観や意図、意志や判断に基づいて、対象に積極的に関わり、自ら考え、選択し、行動する」という競技への取り組み方とも関連しているといえよう。

### 4) 自己主張と人間関係の構築

このカテゴリーでは、「生徒同士で厳しいことを言い合う」ことが他人と主体的に関わることに繋がるという

意見が得られた。高校生を対象に「主張性」と精神的適応との関連について検討した渡部(2008、2009)は、「主張性」を構成する四要件の一つに「行動に対する主体的な判断」を挙げている。ここでの「主体性」は、「相手の意見やその場の雰囲気」に流されることなく、自分の意思で行動を決定する」態度として扱われており、このように行動することで、精神的適応が良好になるが、主体性が非常に高い者は、過剰に自己の意思を優先することにより不適応がもたらせることも示され(渡部、2009)、良好な人間関係を築く上では、どこまで主体性を発揮するかが重要であることが推察される。

なお、この4つのカテゴリー以外の反応として「顧問教員の介入を最小限にし、見守る態度をとる」というカテゴリーが抽出された。しかし、このカテゴリーについては、生徒の取り組みではなく、顧問教員の心掛けに関わる内容のため、この質問項目の結果からは除外した。

### まとめと今後の展望

本研究では、中学で運動部活動を指導する顧問教員を対象に、彼らの考える主体性の定義と、生徒が部活動に主体的に関わる具体的な態度や行動について調査した。その結果、本研究における顧問教員の考える主体性とは、「他者からの指示を受けることなく、生徒が自発性をもって、意図的に目標や課題に向き合う態度や行動」であり、その具体的な態度や行動は、1) 試合の分析や目標設定を自身で行う、2) プレイの課題及び技能習得への関心を持ち、試行錯誤しながら取り組む、3) 練習への専心的取り組み、4) 自己主張と人間関係の構築の4つのカテゴリーが得られた。すなわち、生徒が部活動に主体的に取り組む行動や態度とは、競技に関心を持ち取り組むことで、自分自身の試合を分析し、課題に対し試行錯誤しながら取り組むことであり、そのような活動の際に他の生徒とお互いに考え話し合うことにより、人間関係に積極的な関わりをもつことができるようになるということが明らかとなった。

本研究では、顧問教員の考える、生徒が部活動に取り組む具体的な態度や行動に関する検討にとどまった。今回は、生徒の取り組みのみに着目したため、結果からは除外したが、顧問教員の面接調査では「顧問教員の介入を最小限にし、見守る態度をとる」というカテゴリーが抽出された。これは、顧問教員が実際の部活動指導において、生徒の主体性を育むために、どのように心掛けているかという内容である。今後はこの点についても検討し、実際の指導法につなげることを目指したいと考えている。

注) 「主体性」は“Autonomy”、“Independence”あるいは“Identity”と英訳されていることが多いが、それぞれを和訳すると「自律性」「独立性」などとして扱われており、類似してはいるが本研究で取り扱っている「主体性」とは定義が異なり、日本独自の言葉であると考えられるため、本研究では英訳を「Shutaisei」とした。

### 参考文献

- 秋葉茂季・角田直也(2016) 大学生アスリートにおける Grit に関連する要因. 国土舘大学体育研究所報, 35: 63-66.
- 浅海健一郎(1999) 子どもの「主体性尺度」作成の試み. 人間性心理学研究, 17: 154-163.
- 浅海健一郎・野島一彦(2001) 臨床心理学における「主体性」概念の捉え方に関する一考察. 九州大学心理学研究, 2: 53-58.
- Duckworth, A.L., Peterson, C., Matthews, M.D., & Kelly, D.R.(2007) Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 1087-1101.
- 藤原喜悦(1968) 自主性の診断. *児童心理*, 22(11):109-115.
- 深見英一郎・岡澤祥訓(2018) 運動部活動の「形成的評価法」作成の試み. *スポーツ教育学研究*, 37: 47-60.
- 藤後あさみ・岡澤祥訓(2015) 柔道選手における目標設定に関する研究: 継続的なメンタルサポートを通して. *奈良体育学会研究年報*, 20: 12-17.
- 日台利夫(1998) 子どもの主体性を生かす教育活動. 「自ら学び自ら考える力の育成, 山際隆・無藤隆編, ぎょうせい, 98-129.
- 今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規(2019) 学校運動部活度の効果に関する研究の変遷と課題. *体育学研究*, 64: 1-21.
- 岩田(2012) 主体性は教えられるか. 筑摩選書.
- 角谷詩織(2001) 中学生の自己、環境に対する認識の変化: 学業コンピテンス、総合的学習、部活動、クラスに注目して. *人間文化論叢*, 4: 237-245.
- 角谷詩織(2005) 部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足度をどのように高めるか: 学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから. *発達心理学研究*, 16: 26-35.
- 角谷詩織・無藤隆(2001) 部活動継続者にとって中学校部活動の意義: 充実感・学校生活への満足度との関わりにおいて. *心理学研究*, 72: 79-86.
- 小見山栄一(1956) 自主性とその評価. *児童心理*, 10:62-66.
- 文部科学省(2013) 運動部活動での指導のガイドライン. [https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/sports/mcatetop04/list/detail/\\_icsFiles/afiedfile/2018/06/12/1372445\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/_icsFiles/afiedfile/2018/06/12/1372445_1.pdf)
- 森岡正芳(2005) 悩みと感化の心理学. 「うつし 臨床の詩学」みすず書房: 122-141.
- 村瀬孝雄(1996) 自覚と成長のために. 「中学生の心とからだ: 思春期の危機をさぐる」岩波書店: 201-219.
- 村上弘明・岡澤祥訓(2014) 高校野球選手を対象としたメンタルサポート実践: 実力発揮・主体性に着目して. *奈良体育学会研究年報*, 19: 37-42.
- 中込四郎(2013) 臨床スポーツ心理学—アスリートのメンタ

## 中学生の運動部活動における主体性

- ルサポーター. 道和書院.
- 日経ビジネス associe (2009) イチロー, 北島康介, 上村愛子一流アスリートに学ぶ本番力. 日経ビジネス associe8 (16) (通号 188) 2009-08-04 pp36-39., 日経 BP 社.
- 大谷尚 (2019) 質的研究の考え方: 研究方法論から SCAT による分析まで. 名古屋大学出版会.
- 岡田有司 (2009) 部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響: 部活動のタイプ・積極性に注目して. 教育心理学研究, 57: 419-431.
- スポーツ庁 (2018) 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン.  
[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/013\\_index/toushin/1402678.htm](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/1402678.htm)
- 鈴木壯 (2008) メンタルトレーニングとカウンセリング. 日本スポーツ心理学会編 スポーツ心理学辞典. 大修館書店: 567-569.
- 氏原寛 (1975) カウンセリングの理論的背景「カウンセリングの実際」. 創元社: 207-247.
- 和田貴広・朝倉利夫・秋葉茂季 (2017) 大学生アスリートにおける主体性と練習の質の関連について: 大学レスリング部における練習への取り組みから. 国士館大学体育研究所報, 36: 15-20.
- 渡部麻美 (2008) 4要件理論に基づく主張性と社会的情報処理および精神的適応との関連. パーソナリティ研究, 16: 185-197.
- 渡部麻美 (2009) 高校生における主張性の4要件と精神的適応との関連. 心理学研究, 80: 48-53.